

気づきにくい色覚異常

信号の色が見分けにくい。人の顔色の変化が見えない。緑の中にある赤い花が見づらい等々、かつては「色盲」や「色弱」と呼ばれていた色覚異常。早期に発見することで、親も子どもも早くから対策を講じることができる。

日本人男性の 20人1人

色覚異常とは簡単にいうと、正常の人に比べて色の感じ方が違うことをいう。「色盲」「色弱」などという言葉が差別的な用語と捉えられることもあり、現在では「色覚異常」や「色覚障害」と呼ばれるようになってきている。日本人男性の20人1人、日本人女性は500人に1人が色覚異常といわれている。

女子の場合は、母親と父親から1つずつX染色体を受け継ぎ、両方のX染色体に色覚異常の遺伝子があると、色覚

異常になる。しかし男子の場合は、父親からはY染色体を受け継ぐので、母親から受け継いだX染色体に色覚異常の遺伝子があると、そのまま発症するため男子のほうが多い。すべての色は、光の三原色といわれる赤・緑・青の3つの光の組み合わせで作られている。網膜には三原色を感じ取る3種類の視細胞があり、この3種類が機能して、すべての色を認識する。色覚の異常は、この3種類の視細胞のうちどれかが足りない、十分に機能しないために起こり、色が識別しにくくなる。

一般的に赤緑色弱ともいわれているのは、3種類の視細胞のうち、赤と緑の区別がつきにくいタイプだ。色覚異常は、見分けにくい色の組み合わせがあり、また薄暗い場所で見たり、小さいものだと色の誤認を起こしやすいが、日常生活上、ほとんど不自由がないため、気づきにくい。

任意になった 学校の色覚検査

色覚検査は「石原式異常検査表」という検査方法を用いて、カラフルな大小様々な丸で描かれた何枚かの絵を見ながら数字を読み上げることで、緑が見え



にくい人は赤と緑で書かれた数字を読むことが困難となり、どの色に異常があるかがこれによってわかり、広く国際的にも使われている。

学校での色覚検査は、以前は小学1、4年、中学1年、高校1年時に行われていたが、平成6年に小学4年のみになった。色覚異常があっても学校生活にほとんど支障がないケースが多く、色覚異常がある児童に対する偏見や差別の